

若狭瓦の歴史と文化遺産

日 時：平成23年9月12日（月）10：00～

場 所：下中井住民センター

小浜市教育委員会 文化課 下仲 隆浩

一焼物の産地 口名田の須恵野村一

自然環境

相生から口田縄にかけては、南川中流域の河岸段丘であり、良質な粘土を産出する。

平安時代から鎌倉時代

平安時代後期（1150前後）須恵野村の須恵野・伊加野

鎌倉時代後期（1314）須恵野四名

[須恵野名・日河名・窪谷名・伊加谷名]

須恵野とは

古代のうつわである須恵器を焼いていた場所

[例：若狭町（旧上中町）末野]

大佐近窯跡（口田縄）・・・8世紀後半から9世紀初

城ヶ谷窯跡（西相生）・・・9世紀末から10世紀前半



大佐近窯跡出土須恵器（杯・皿・蓋）（8世紀後半～9世紀初）
小浜市口田縄



相生城ヶ谷窯跡出土須恵器（杯・皿・蓋）
（9世紀末～10世紀前半）小浜市相生

一瓦葺きの歴史一

飛鳥・奈良時代

仏教や律令が大陸から伝来し、それとともに寺院や役所の瓦葺きが進んだ。
(小浜では松永の太興寺や遠敷の神宮寺[神願寺]が初現)

平安時代から室町時代

本瓦葺きは重みがあり、木造建造物の耐久に大きく影響を及ぼすのでそれほど進まず、権威を見せる役所や寺院の一部で使われていた。

(一般建築の屋根は、草葺きや茅葺き、板葺き、コケラ葺き、桧皮葺きなど)

戦国時代から江戸時代中ごろ

城建築で瓦葺きの技術と建築技術が向上する。寺院や武家屋敷、土蔵に普及しはじめる。粘土切り離しが糸引きから鉄線引きに技術革新。

江戸時代中ごろ以降

寺院や武家屋敷への供給が進むにつれて、技術者の養成が進み産業化する。町場への人口密集が進み、防火の観点から町家にも瓦葺きが普及しはじめる。また、棧瓦の開発による建物への屋根軽量化の影響も普及の一端となる。

(人口密集都市や港の近くで産業化

江戸・大和・河内・石見・三河・若狭など)

一若狭瓦誕生まで一

小浜城の瓦葺きによる技術革新

(『若狭郡県誌』1693年)

「瓦 下中郡福谷村有瓦工、國主賜食料常二造瓦以テ充國用、其所造之土出ル自尾崎村者為上品、然トモ近世絶ユ、故ニ今自大飯郡加斗庄取来テ而造之、是モ亦為良也」

(『稚狭考』1767年)

「瓦は甲か崎・西津の間の海辺にて焼て、官家の御用にのみ焼せ給ひて國中に瓦はなかりしに、元文年中木谷某此事に預り、田縄村に瓦をやき納る事となりたり。其頃吉見某新滝谷村にても私にやきて國中にうるにつきて、村里の寺院、町方の蔵等瓦葺の事はしまる。其後丹後田辺瓦工大飯郡加斗村にて焼て國中にうり、國中寺院大半瓦葺になりぬ。」



甲ヶ崎周辺(瓦師と船蔵)

小浜城や武家の瓦は、福谷で焼かれ、海沿いの蔵に保管された。そして船で小浜城下に運ばれた。

(蘇洞門景觀絵図)

—若狭瓦の製作と運搬—

製作地

1. 良質の粘土が採掘される場所
 2. 南川による川舟運搬のため、河川の近く。
- ※ 名前として残る「瓦師道」

過程

(1) 土練り

水加減をしながら足で粘土を踏む。大きなものは鍬でくだき粘りをだして粘土の塊「タタラ」に仕上げる。

(2) 荒地取り

針がねや定規を使って瓦の大きさに仕上げる。木型にとって4枚重ねた「荒地」にする。昭和以後は機械化。

(3) 天日乾燥

「荒地」を両手にとってたるまない程度まで乾燥。

(4) 成型

木型にのせて余分な粘土を切り取る。昭和以後は機械化。

(5) 手入れ

さらに乾燥させたものをコテとヘラで磨く。

(6) 乾燥

「白地」と呼ばれる状態まで、天日および屋内で乾燥させる。

(7) 窯焚き

- ・ 窯入れ・・・だるま窯に並べて入れる。
- ・ 焼成・・・約 1000℃まで温度上昇した窯で約 30 時間。
- ・ 燻し・・・焼成後、松で約 3 時間燻す。
- ・ 窯管理・・・密封して酸化防止を図り、水を注入し圧力を加える。
- ・ 窯出し・・・窯から製品を取り出し、品質仕分けを行う。



運 搬

製品は、江戸時代末から大正時代の初期には川舟

- ・川舟規模・・・3人乗りで幅2m、長さ15m
一艘あたり600~800枚の瓦を積む

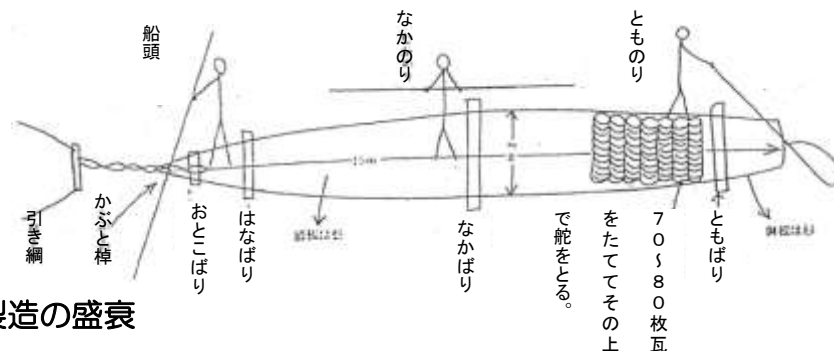
- ・行程(相生⇔川縁)・・・下り1時間半、上り3時間半

※ 船を何艘かつなぎ合わせて下る。大正時代で1艘あたり運賃2円。
約70人の船乗りがいた。

川縁の間屋は、北前船のバラスとして日本海沿岸に輸出するとともに、若狭・丹後・湖西に流通させた。

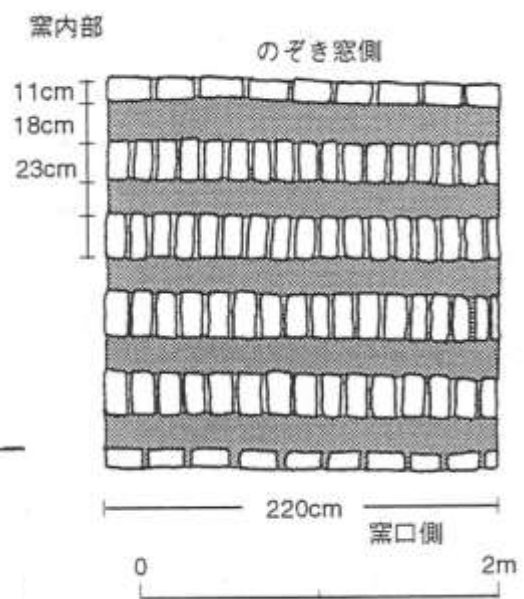
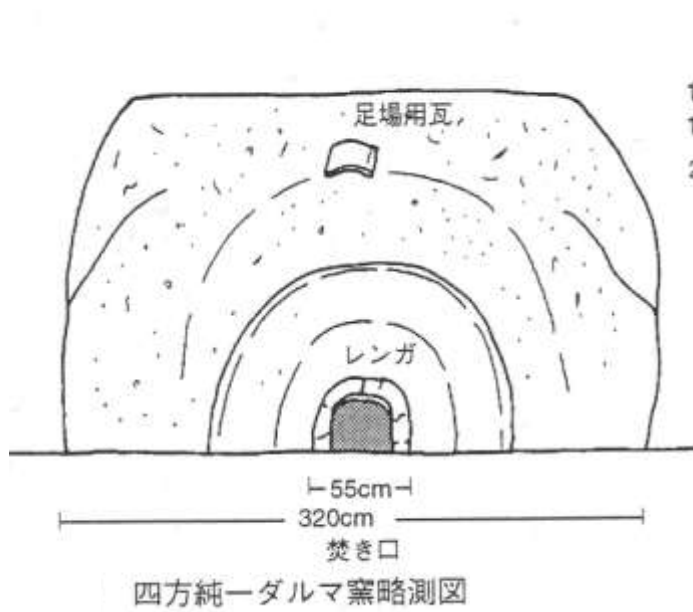
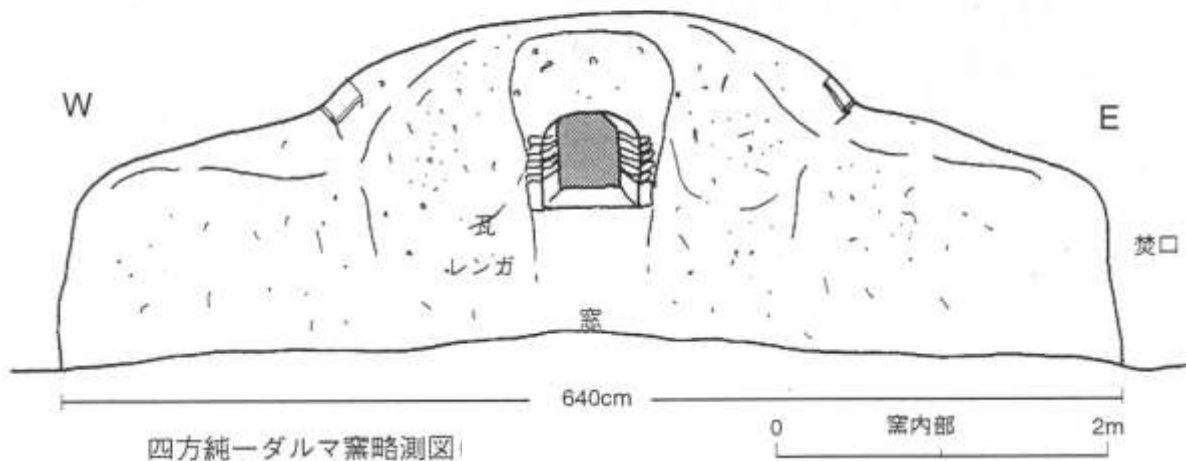
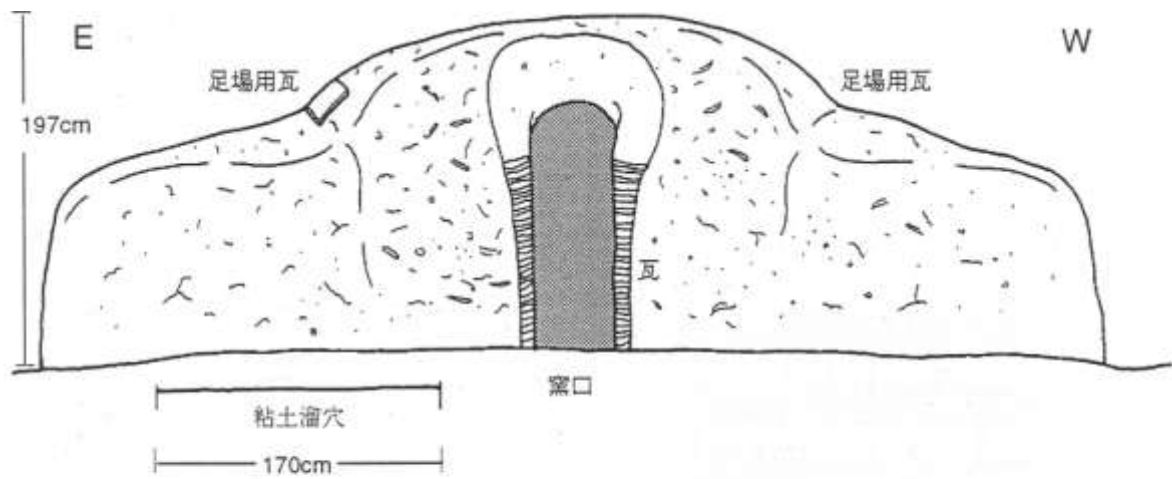
昭和に入り道路が整備されて川舟は衰退

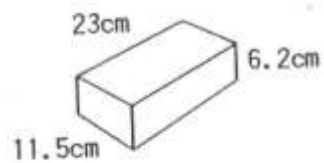
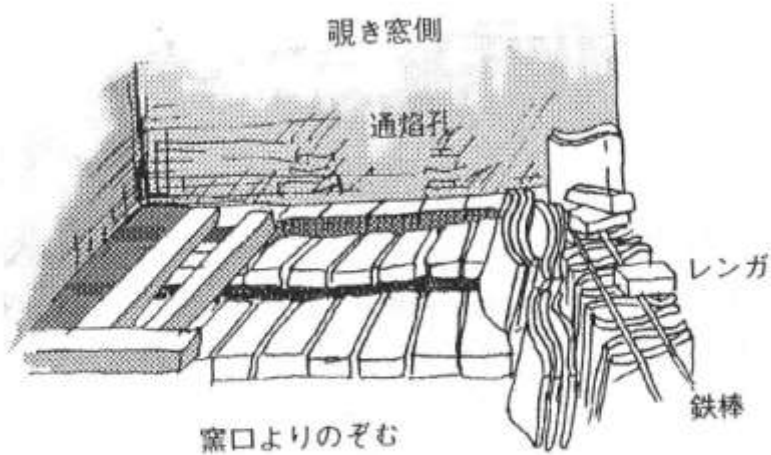
戦後すぐの運賃は、□名田⇒宮川で1枚1円。



瓦職人と瓦製造の盛衰

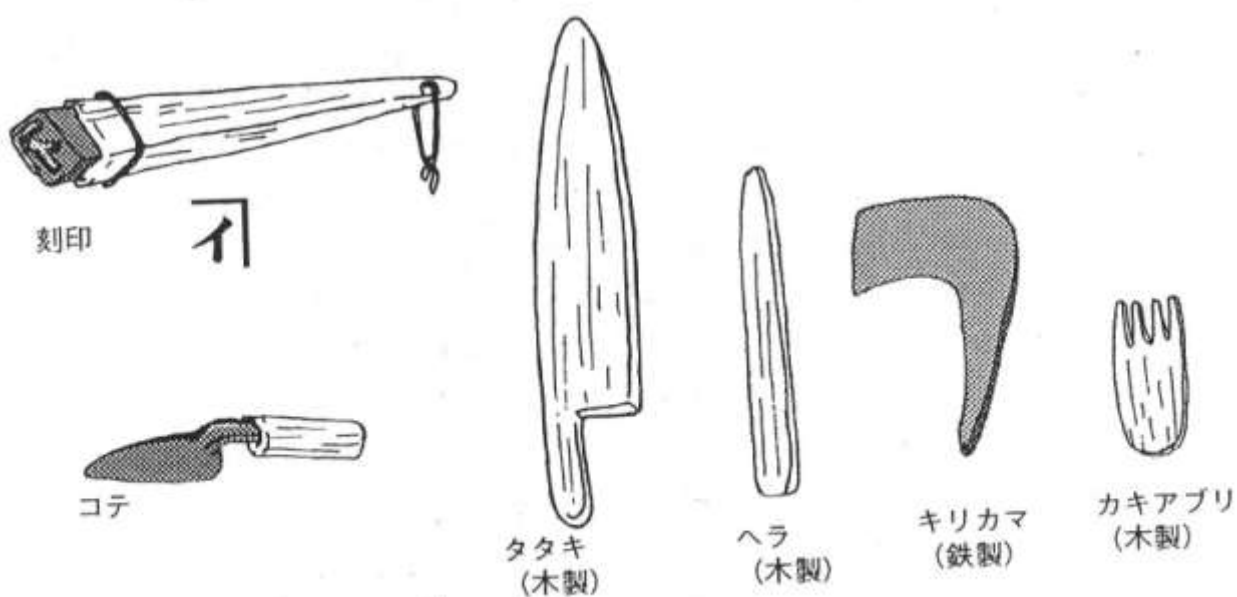
- ① 江戸時代中期
木谷〇〇 (□田縄)、吉見〇〇 (新滝)
- ② 江戸時代後期
嘉永4年 (1851) 吹安の鬼瓦へう書「窪谷村瓦師九右門」
嘉永5年 (1852) 高成寺の鬼瓦へう書「窪谷村 九右衛門」
安政5年 (1858) 窪谷瓦師善右衛門 (上前家普請帳)
安政6年 (1859) 窪谷・惣右衛門 (吉岡家文書)
五十谷・小三郎、小太夫、喜太郎 (吉岡家文書)
- ③ 明治時代前期
5~10軒? 生産枚数80~100万枚
- ④ 明治時代後期
業者10軒 生産枚数200万枚
- ⑤ 大正時代
業者20軒 (従業員120名) 生産枚数674万枚
若狭瓦合名会社 (大正7~昭和3)
- ⑥ 昭和 (戦後)
業者15軒 生産枚数300万枚
若狭瓦工業組合 ⇒ 若狭粘土瓦協同組合
若狭窯業株式会社 (昭和24~昭和31)
- ⑦ 平成初期
業者2軒 生産枚数3万枚



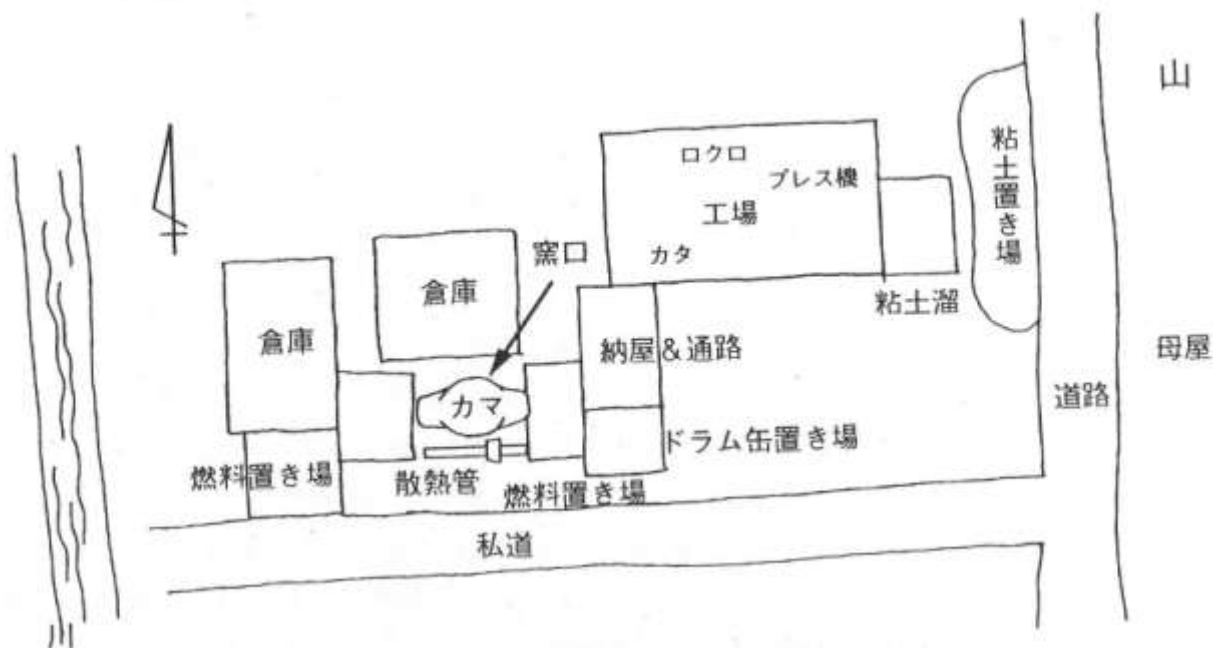


赤レンガのサイズ

窯内部 (スケッチ)






道具類 (スケッチ)



江戸以降 若狭瓦刻印一覧

[小浜城発掘調査および若狭粘土瓦協同組合資料・資料調査により作成 2002 下仲 隆浩]

刻 印	屋 号	創 業	廃 業	操業地	備 考
	不 明	17 世紀前	不明	不明	小浜城Ⅱ
	不 明	17 世紀前	不明	不明	小浜城Ⅱ
	不 明	17 世紀前	不明	敦賀舞崎？	小浜城Ⅲ (赤瓦)
井 ○ <small>(いろは・漢数字)</small>	福谷官窯	17 世紀後	18 世紀中？	西津福谷	初期官窯 小浜城Ⅳa
井 木 ○ <small>(いろは・漢数字)</small>	新滝谷官窯	18 世紀中	18 世紀後？	口田縄	小浜城Ⅳb
日 ○ 月 ○ <small>(いろは・漢字)</small>	口名田窯？	18 世紀後	19 世紀前	(窪谷・桂・ 中井・田縄 滝谷・新滝)	小浜城Ⅴ 民間窯として活動
か ○ <small>(いろは・漢字)</small>	加斗窯？	18 世紀後	19 世紀前	加斗村	小浜城Ⅴ 民間窯として活動
	大枝九右衛門	江戸後期 (不明)	明治 20 年頃	西相生 (窪谷)	これ以後口名田窯 ↓
	古谷四郎右衛門	江戸後期 (不明)	昭和 16 年頃	上中井 (五十谷)	
	四方吉次郎	江戸後期 (不明)	大正 7 年	東相生 (桂)	
	上窪六兵衛	江戸後期 (不明)	大正 7 年	西相生 (窪谷)	同印 
	的場治郎五郎	明治初期	大正 13 年頃	口田縄 (田縄)	
	木下六郎左衛門	明治初期	明治 35 年頃	東相生 (桂)	
	武藤利兵衛	明治初期	明治 30 年頃	口田縄 (田縄)	

刻印	屋号	創業	廃業	操業地	備考
	古谷新太郎	明治初期	明治 33 年頃	上中井 (五十谷)	
	寺脇五右衛門	明治初期	明治 33 年頃	上中井 (五十谷)	
	野瀬助治郎	明治初期	明治 20 年頃	西相生 (窪谷)	
	大枝九兵衛	明治初期	明治 20 年頃	西相生 (窪谷)	
	武内源助	明治初期	明治 30 年頃	口田縄 (田縄)	
	古谷吉次郎	明治初期	明治 30 年頃	上中井 (五十谷)	
	古谷久次郎	明治初期	大正 10 年頃	上中井 (五十谷)	
	西本半右衛門	明治初期	大正 6 年頃	須縄 加斗	
	吉岡小太夫	明治中期	昭和 17 年頃	上中井 (五十谷)	
不明	古谷四郎太夫	明治中期	明治末期	上中井 (五十谷)	
	紙谷庄次郎	明治 30 年頃	大正 7 年	西相生 (窪谷)	野瀬助次郎から引継ぎ
	野瀬与右衛門	明治 20 年頃	大正 7 年	西相生 (窪谷)	
	野瀬庄助	明治 15 年頃	昭和 15 年頃	西相生 (窪谷)	同印 
	絹谷善太夫	明治 30 年頃	明治 40 年頃	上中井 (五十谷)	古谷吉次郎から引継ぎ
	寺本治兵衛	明治 25 年頃	昭和 60 年	上中井 (五十谷)	

刻印	屋号	創業	廃業	操業地	備考
イ	四方吉右衛門	明治 33 年	—	東相生	寺脇五右衛門から引継ぎ
ト	富田伝右衛門	明治 35 年頃	昭和 12 年頃	新滝	
不明	小沢三左衛門	不明	大正 15 年頃	下中井	
キ	溝上滝右衛門	明治 35 年頃	昭和 7 年頃	東相生	
ウ	古谷幸吉	明治 37 年頃	昭和 28 年頃	上中井	
小	吉岡小三郎	明治 40 年頃	昭和 60 年頃	上中井	
六	森下源助	明治 35 年頃	明治 40 年頃	東相生	木下六郎左衛門から引継ぎ
正	大野庄兵衛	明治 35 年頃	明治 40 年頃	下中井	
六	四方清右衛門	明治 40 年頃	昭和 14 年頃	東相生	森下源助から引継ぎ
合	田中喜兵衛	明治 40 年頃	大正 8 年頃	須縄	尾崎住
●	吉岡伝之丞	大正 2 年	平成 1 年	上中井	野瀬与右衛門から引継ぎ?
サ	上窪佐太夫	大正 3 年	昭和 50 年頃	西相生	
ウ	富岡宇左衛門	大正 7 年	昭和 60 年	滝谷	
一	四方吉兵衛	大正 13 年	昭和 60 年	東相生	紙谷庄次郎から引継ぎ?
金	水船金平	大正 15 年頃	昭和 20 年頃	口田縄⇒ 上中井ノ口	

刻印	屋号	創業	廃業	操業地	備考
◎	野瀬与右衛門	昭和3年	昭和25年	西相生	
ㄣ ヒ	東四郎太夫	昭和5年頃	昭和10年頃	西相生	
ㄣ +	水口善兵衛	昭和5年頃	昭和13年頃	東相生	
⊙ キ	野瀬善六	昭和7年	昭和8年	東相生	溝上滝右衛門から引継ぎ?
⊙ キ	溝上久助	昭和8年	昭和9年	東相生	溝上滝右衛門から引継ぎ?
⊙ 六	森下種次	昭和14年	昭和45年	東相生	四方清右衛門から引継ぎ?
⊙ ツ	小澤小左衛門	昭和14年	昭和48年	下中井	
ㄣ 久	久故久太夫	昭和21年	昭和60年	上中井	
⊙ 三	若狭瓦合名会社	大正7年	昭和21年	西相生	野瀬庄助・野瀬与右衛門・紙谷庄次郎・四方吉次郎
⊙ 三	八尾久光	昭和22年	昭和55年	口田縄	合名会社解散後に引継ぎ
◎	岡又左衛門	昭和28年	昭和48年	東相生	合名会社解散後、野瀬与衛門から
ㄣ 庄	上窪右左衛門	昭和29年	昭和60年	東相生	合名会社解散後、野瀬庄助から
⊙ 三	団野・吉岡	不明	不明	滝谷 上中井	












刻印	屋号	創業	廃業	操業地	備考
大	不明	不明	不明	不明	
ユ	不明	不明	不明	不明	
カ	不明	不明	不明	不明	
+	不明	不明	不明	不明	
イ	不明	不明	不明	不明	
ニ	不明	不明	不明	不明	

口名田村出身 若狭瓦創業者

刻印	屋号	創業	廃業	操業地	出身
ソ	小川宗左衛門	明治48年頃	昭和28年	名田庄村 三重	上中井
	小川藤吉	大正10年頃	昭和50年頃	上中町 長江	上中井
金	水船政治（金平）	昭和21年	昭和50年頃	上中町 井ノ口	口田縄
	古谷喜代隆	昭和24年	昭和50年頃	三方町 食見	上中井
	澤田仁左衛門	明治40年頃	昭和初期	三方町 食見	須縄
	内藤佐伍衛門	明治40年頃	大正末期	三方町 食見	須縄

小浜西組主要軒先瓦変遷図

軒平瓦(対象右配置は庇軒瓦・大正から昭和初期になくなる)

元号	西暦	変遷図
明治	1850	 <p>山に丸(大枝丸右衛門)</p>
	1860	 <p>山に吉(四方吉次郎)</p>
	1870	 <p>山にり(武藤利兵衛)</p>
	1880	 <p>山または「に六(上窪六兵衛)</p>
	1890	 <p>「に一(古谷四郎右衛門)</p>
大正	1900	 <p>山または「に庄(野瀬庄助・野瀬組)</p>
	1910	 <p>◎で中黒(野瀬与右衛門)</p>
	1920	 <p>「に小(吉岡小三郎)</p>
昭和	1930	 <p>〇に一(野瀬助治郎)</p>
	1940	 <p>(瓦組合一八尾)</p>
	1950	
	1960	